

## 視察5 プーリア州 バーリ県（農業部門）との意見交換

### 1. 視察日時等

○日 時：10月16日（水）14：00～16：00

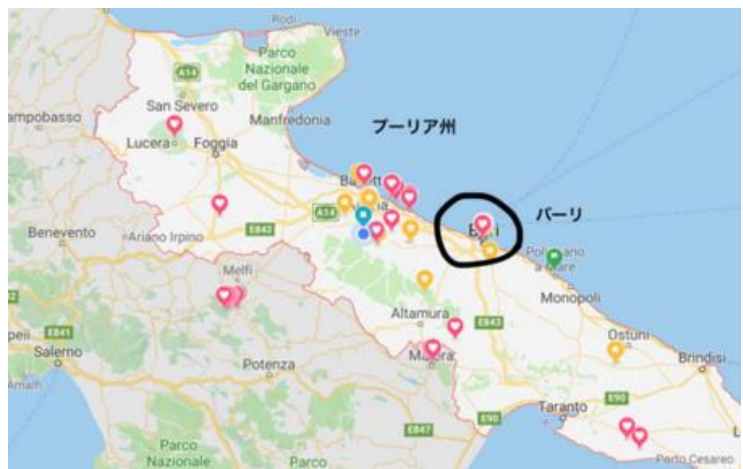
○視察先：バーリ県（農業部門）

○対応者：ジャコモ・カッレラス氏

ジョバンニ・ガタレータ氏

○バーリ市の農業の概要

バーリ市の特徴は、川はほとんどなく、湖などの貯水施設などもない。さらには年間の降水量も少なく、数か月雨が降らないこともある。よって水源は地下からくみ上げた水を利用している。



この土壌において栽培可能な作物は、オリーブ、ブドウ、チェリー、モモ、アーモンド、花と鉢植えの観賞植物、野菜や穀物である。

さらにはバーリ市では、農産物の加工品が多くあり、特にオリーブオイルなどのクオリティは高く評価が高い。

### 2. 研修内容

○佐賀県とバーリの農業についての意見交換会

意見交換に先立ち、お互いの国について知るため、お互いの国の農業について概要紹介し、その後意見交換を行った。



佐賀県の農業の概要は次のとおり。

農地の面積は県内面積の2割が農地で全国平均の倍あり農家割合も7.3%とこちらも全国平均の2倍で佐賀県が国内でも農業が盛んと言えるが次のような課題も存在する。

佐賀県の農業の課題

- 農業従事者の高齢化や担い手不足
- 農業所得が低い
- 耕作放棄地の増加
- 台風や大雨などの自然災害により被害

佐賀県ではこのような問題を解決し農業の担い手が地域資源を活かして継続的に稼げる農業を実践するため佐賀園芸生産888億円推進運動を実施している。

これは10年後の佐賀の園芸生産額を増加させる運動で主な支援内容は以下のとおり

佐賀県の農業の課題

- 新規就農者などの担い手に対する支援
- 園芸用のハウスや機械の導入に関する補助
- AIやIoTを活用した先進技術の活用
- 労働力不足に対応する仕組みづくり

バリー県・プーリア州は、丘陵地帯が州の半分を占め、残り半分を平野部が占めた緩やかな地形でイタリアの半島にある州の中で最も海岸線の長い州である。主にオリーブ・ぶどう・さくらんぼ・アーモンドなどの栽培が盛んで、海沿いの地域では花の栽培も盛んである。

佐賀県は佐賀平野に広がる肥沃な農地を活用し、米麦大豆の作付けが盛んである。また近年は施設園芸にも力を入れており、園芸用ハウスでの野菜栽培や露

地野菜の栽培が盛んである。日本ではみかんはハウスと露地の両方で栽培されるが、イタリアではハウスでみかんを栽培しないらしく、この点についてはとても関心を持たれていた。

意見交換の結果、佐賀県とバーリ県・プーリア州で似ている部分も多くあったが、有機農業に対する意識や取り組み面積については大きな違いがあった。

バーリ県・プーリア州では、化学肥料や農薬をほとんど使用しない有機栽培に力を入れており、プーリアの野菜は安心・安全な野菜であるとのこだわりがあった。これは土地を育てることになり、農業の持続可能性についても考えられていた。



日本では消費者の意識に「日本の食品は安全」という考えが根付いているのか、有機農業に対する意識が低いように感じられた。もちろんイタリアでも健全な食品を大事にする意識を根付かせるまでには長い闘いがあった。

他には新規就農支援などについて話をした。バーリでは新規に農業を始めた方に対するチャレンジ制度（貸付制度）があり、5年間続けたのち、売却してもいいとの事であった。この制度は20年くらい前から始めているが、ほとんどの人が農業を続けられている。近年の就農者の傾向として大学卒の方が増えており、以前と比べ状況は変わってきているといわれていた。

また農業者の高齢化による労働力不足については日本もイタリアも同じだが、日本の方が農業者の減少幅が大きく今後の不安が大きかった。

## ○質疑応答

日本 ⇒ イタリア

Q 1 イタリアでも台風等の自然災害による作物の被害はあるか。

A 1 大雨や台風などはないが、ひょうの被害がある。果物の収穫時期に降ることがあり、その際は被害が深刻になる。

Q 2 新規就農者への支援はあるか。

A 2 支援はある。日本と違い数年やってダメならやめてもいい制度になっているので取り組みやすい。この制度は20年以上前にはじまったがほとんどの人が農業を継続している。昔の新規就農者は低学歴の方が多かったが近年は大学卒が増えてきて状況が変わってきている。

Q 3 耕作放棄地問題などはあるか。

A 3 耕作放棄地はあまり問題になっていない。

Q 4 改善していかないといけないところは。

A 4 クオリティをあげながら経費を減らす事。

イタリア ⇒ 日本

Q 1 ビニールハウスのいらなくなったビニールはどうしてるのか。イタリアではそのあたりに捨てる人が多くいるので

A 1 日本では、市町により状況が違うが農業用プラスチックなどの処理費に対する助成がある。

## 3. 所感

日本とイタリアの農業者の意識で大きく違うと感じたのは、有機農業へのこだわりの強さだった。

日本では病虫害対策や収量を増やすために除草剤や化学肥料等を使用するが、イタリアではこれらを極力使用しないことにより土地（土壌）を守り、土地を育てることにより、長期的に農業ができるよう持続可能性についても配慮している人が多い傾向にある。

また、日本では面積が狭いこともあり、収量が多く取れるように作付けを行うが、イタリアでは収量が増えすぎると品質が下がってしまうので、取れすぎないようにしている。

例えば日本では、いちごの高設栽培施設等が増えてきているが、バーリ市ではあえて土耕に戻す人が増えており品質へのこだわりを感じた。



この品質へのこだわりが価格にも反映されており、またイタリア国民も安さではなく品質がよいものを買う傾向にあるので農家所得の安定にもつながっている。